

## Special Essay

## はるよこい

医学図書館長 中村桂一郎

今年の医学図書館前の桜は平年より一週間も早く開花しました。いつも学会出張と重なり、花を楽しむことができなかつたので、なにやら得した気分です。筑後川河川敷に咲く菜の花の黄色も鮮やかです。この図書館ニュースが発行される頃には、黄色の絨毯は一斉に芥子菜の白い花に置き換わり、意気込み新たな医学科、看護学科、臨検校の学生さん達の生活が始まっていることでしょう。ヒトと自然が織りなし移りかわる風景を講義室に向かう廊下の窓から毎年興味深く眺めます。医学図書館正面玄関にある石橋正二郎氏寄贈の石版や‘飛翔’と題された石彫は刻まれた風景です。普段、立ち止まってみることもありませんが、10年前こちらに着任した頃、久留米大学の記録かと眺めたことでした。

さて、図書館ホームページで、医学図書館ニュースのエッセイを拝見すると、皆それぞれの思いを胸に、色々な立場でこの図書館をかわいがっておられるようです。電子ジャーナル化の定着、電子書籍・情報の増加に伴い、実際に図書館に足を運ぶことが少なくなっていることはやや寂しいところです。それを踏まえ、将来の図書館はどうあるべきかという意見もみられます。かつてはメディアセンターとしての役割も提言されておりました。大学図書館全体からすると、次は医学図書館の見直しをとという声も聞かれます。試験前の集中が目立つとはいえ、学生さん達にとって図書館は、個人の学びや大小グループによるコミュニケーションの場として、なくてはならない空間です。ここに集う学生、教職員を超え、更に、諸先輩や市民の方々をも交えた人間関係を通じて、それぞれが研究・教育・診療に思い切り豊かな学究生活を謳歌できる、そのような場としての一層の充実・発展が望まれます。それにつけても、新たな展開の萌しを感じられる、そのような季節の訪れを期待したいと思います。

四月より医学図書館長を拝命しました。少しでも皆さまのお役に立てたらと思います。まずはお声をお聞かせください。どうぞよろしく願いいたします。

